

## 大会報告「ウルク・ワールド・システム」

## Reports on the Uruk World System

本報告は、平成13年6月3日に中近東文化センターで開催された第6回総会・大会の討論会『「ウルク・ワールド・システム」をめぐって—都市形成期の文化拡散—』をもとに編集した企画である。討論会に臨むにあたり、企画委員が中心となって各地域の研究で最前線に立っている専門家に発表を依頼した。討論会そのものは時間的制約もあり、報告的な内容にとどまった。そこで、本テーマの内容を深く掘り下げるために、各発表者に発表内容をもとに新たに書き下ろしてもらった。討論会の準備・運営は藤井・紺谷らが中心となり、本報告の編集は小泉が行った。構成は以下の通りである。

導入／概説／コラム／インダス／エジプト／バーティア／  
アナトリア／北メソポタミア／南メソポタミア／総括

## ウルク・ワールド・システムをめぐって

## —問題提起—

紺谷亮一

Reports on the Uruk World System :

Setting the Issues

Ryoichi KONTANI

われわれ日本西アジア考古学会では、定例研究会として過去にさまざまなテーマを扱ってきた。毎年、西アジア考古学におけるホットな話題とともに、従来からきちんと論議すべきなのにやり残されてきたテーマを取り上げようとしてきた。たいてい10月から翌年3月まで毎月、講師を招いて筑波大学茗荷谷校舎で研究会を行う。定例会終了後は三々五々茗荷谷近辺、もしくは池袋近辺で興奮の続きを語り合うことがひそかな楽しみとなっている。そこでは専門的な話以外にもざっくばらんな話し合いがされている。

今回、2000年度定例研究会で「メソポタミアと周辺地域—西アジアにおける中心と周縁—」という年間テーマを選択し、これを基礎としながら第6回総会・大会において「ウルク・ワールド・システムをめぐって—都市形成期の文化拡散—」というテーマを選んだ。その理由には国内における「四大文明展」の開催が大きく影響したとあってよい。本特集は総会において各地域の専門家が諸々の問題提起に従って発言したものが下地となっている。

西アジア考古学を研究する者ならば誰でも「四大文明」という区分だけでは人類史の理解は不十分であるというイメージを持つはずである。事実、「四大文明展」の監修の方々自らも古代文明の地域を限定してしまうのでは不十分であ

ると指摘されている（吉村ほか 2001）。だが、国内における古代文明の固定観念には強固なものがあり、高校教科書においてもわざわざ「四大文明」の項を設けているほどである。さらに、S. ハンチントン（Huntington）著『文明の衝突』に見られるように、文明が生存競争をしているような意味合いをもたせるにいたって、われわれ日本人は「四大文明」を過大に評価してしまったきらいがあるのではない。少なくとも海外において「四大文明」という概念はほとんど聞いたことがない。それは即座に「四大文明」の非有効性を物語るものではなく、日本独自の世界観があってもなんらかまわらないのである。だが、それはあたかも現代文明を謳歌する欧米に対して自ら辺境意識を持ち続ける日本特有の概念のような気がしてならない。つまり一端、固定観念ができあがるとそれを具体的に検証しようとする姿勢は希薄になってしまう。

固定観念は何も日本だけのものだけではない。欧米というよりはアメリカを中心とする西アジア考古学者達を啓蒙した理論、それがG. アルガゼ（Algaze）によるウルク・ワールド・システム論である。キーワードは「中心」と「周辺」である。「中心」とは言うまでもなく、シュメールつまり南メソポタミアである。アルガゼの理論は、西アジア考古学

研究の主流となりつつあるウルク期研究をリードするものである。アルガゼに代表されるように考古学者自らが「中心」と「周辺」という概念を提出してくる背景には、かつて移民である彼らがアメリカ大陸を彼らなりの開拓者精神によって支配していった歴史が交易ネットワークを通じた古代メソポタミアの文化拡散とアメリカ文化の拡散(ある意味ではマクドナルドやケンタッキーフライドチキン)とが類似して見えているのかもしれない。だが一方で、南メソポタミア地域以外において調査・研究している立場からはこの理論は必ずしも全面的に受け入れられるものではなかった。筆者の立場もこれに近い(紺谷2001)。たとえば、「周辺」とされている地域は単なる資源供給地ではなく、鉱物資源を再生産し金属製作技術体制がかなり古い段階で成立していることをどう考えるのか。具体例を示せば、筆者自身が興味を抱いているアナトリア、黒海沿岸、コーカサス、バルカンといった地域では、自らの領域にある鉱山帯を有効に生かしながらほぼ同時期に画期を迎えている(紺谷1999)。この画期が文化伝播によるものなのか、同時多発的なものなのかは熟考を要するが、高度な冶金術成立の古さと空間的な発展という立場からはメソポタミアを完全に凌駕している。つまり、アルガゼが言うような「鉱物資源や木材などの天然資源を主な輸出品としている周辺地域」という概念は必ずしも妥当な見解とはいえない。とくに筆者が釈然としないのは、ウルク・ワールド・システム論では交易ネットワークの中核である南メソポタミアは灌漑農耕によって生産された穀物や織物といった複雑な人的支配を可能にする生産様式を有しながら都市化、帝国化への道を走る。それに対して、生産手段の大きく違う周辺地域では天然資源を主な輸出品としているため、社会システムが機能しなくなる、という指摘である。これではあまりにも農耕と交易のみに立脚した南メソポタミアの視点ではないか。後出の藤井らの主張する遊牧民や移動民の存在等は大きく抜け落ちているのではないか。

このように記すと、ウルク・ワールド・システム論を批判ばかりしているようにみえる。だが一方で、このようなダイナミックな理論に胸を揺さぶられるのも事実である。とくに、細部に気をつかうものの全体像を把握することが比較的苦手なわれわれ日本人には、一種のあこがれを持つ部分があるのも事実だろう。ほかにも、H. ワイス(Weiss)による「北メソポタミア=天水農耕」と「南メソポタミア=灌漑農耕」といった生態系の相違に着目したドライファーム理論など、アメリカ人研究者には実証性よりも理論を先に提出する傾向が強い。日本やドイツの研究者気質と

は一線を画するものである。だからこそ、われわれはウルク・ワールド・システム論が具体的に検証できるかという疑問とともに、その理論に対する強い興味をおぼえるのであろう。

ウルク・ワールド・システムについての詳細な概念等については小泉の論考を見ていただきたい。ただし、強調しておきたいのは、古代西アジア世界においてある意味で中心主義をとるメソポタミア地域に対してただ単にレジストするのではなく、メソポタミアと周辺地域の関係を従来通り「中心」と「周辺」と考えるのか、それとも従来とは違った視点でメソポタミアとは違った文明、都市性をもった地域を浮き彫りにできるかという点である。討論会ではそこに重点を置いたつもりである。それは単なる周辺とか辺境とされる地域の市民権獲得、マイノリティの名誉回復といったものとは一線を画するものである。そのためにも、従来辺境とされている地域、つまり「周辺」とされている地域を主体にしながら、メソポタミアに対して発信することが何よりも重要であるということになる。討論会では司会者である藤井の指摘も含めて以下の点を最低限の確認事項とした。

- 1) 当該地域はウルク・ワールド・システムの中の資源供給地にとどまったか否か。
- 2) 当該地域で都市化が認められる場合、それはウルク・ワールド・システムの拡大に起因するか否か。
- 3) 否の場合、どのような経緯が認められるか。
- 4) 各地域でウルク・ワールド・システムをどう評価したか。
- 5) 限界があるとすればどこが問題か。
- 6) 新たな視点は当該地域から生まれうるか。

以下の各論では、それぞれの地域の専門家による鋭い指摘や提言がなされ、1)～6)までのいずれかについては必ず触れられているはずである。机上の空論ではなく、自らのフィールドに立脚しながら具体的にウルク・ワールド・システム論を検証した各論考には、われわれの概念を再考させてくれるきっと何かがあると信じている。

#### 参考文献

- 紺谷亮一 1999 「黒海沿岸文明圏の提唱」『史境』138・39号 70-91頁。  
 紺谷亮一 2000 「ワールドシステムの外側—トロイとダニューブ河流域からの視点—」『歴史人類』29号 79-96頁。  
 吉村作治・後藤 健・松本 健・近藤英夫・鶴間和幸 2001 『キーワードで探る四大文明』NHK 出版。